

ご挨拶

「つながる」ということ

公益社団法人 宮城県精神保健福祉協会
みやぎ心のケアセンター
センター長 福地 成

東日本大震災から10年、みやぎ心のケアセンターが開設してから10年が経過しました。2021年度より本誌は紀要改め、年間活動報告として皆様にお届けいたします。

これまでの間、当センターの活動を見守り、ご支援いただいた皆様に心より感謝申し上げます。当センターは全体15年間の活動のうち11年目となり、およそ3分の2が過ぎたこととなります。いわば「第二次コケセン」に差し掛かり、終息に向けて舵を切り、段階的に規模を縮小していくこととなります。

私たちは大災害後の心のケアに取り組むなかで、「つながり」をつくることを大切にしてきました。大災害はコミュニティに大きな衝撃を与え、個人とコミュニティのつながりを分断し、回復のための土台を揺るがしました。私たち支援者は、その人たちが生活するための自律性を取り戻すために、いろいろな工夫を凝らし、コミュニティとつながる仕組みをつくってきたと言えます。ところが、この軸となる取り組みは、コロナウイルスの感染拡大によって根本から問いただされることになりました。感染を予防するために、対面式でつながることを控えなくてはならなくなりました。私たちにとってコロナ禍は、「つながり」が与えるこころの安寧の本質について改めて考える機会になったと思います。

ハグをする。手をつなぐ。お喋りをする。ただ一緒にいる。つながる形はいろいろありますが、私たちはどの要素が大事と考えて活動をしてきたのでしょうか。考えてみれば、つながるとい言葉の意味はとても曖昧です。きっと、そこに所属しているとか、自分の居場所があるとか、安心できるということなのだろうと思に至りました。直接会うことができなければ、所属していると思うことができる、自分の居場所があると感じることができる働きかけをすることが必要なのだと思います。いわば、個々人のコミュニティに対するアイデンティティーを確認、強化するということなのでしょう。コロナ禍では、webという新しいデバイスを使って人々がつながり、コミュニティから分断されないようにする取り組みが行われています。私たちもその新しい流れに乗り遅れないように、日々変化していく必要があります。

震災復興の活動のなかでも、10年を経て新たな問題に直面し、状況に応じた変化と工夫が求められています。それでも、しぶとく、愚直に「つながる」ことに取り組み、頑丈で温かいコミュニティづくりに寄与できればと思っております。これからも当センターに対して、皆様のご指導、ご鞭撻を頂ければ幸甚です。